

実習を軸とした本学独自科目「保育基礎ゼミ」と 実習指導の連携についての現状と課題

高砂 朋子*, 永谷 孝代**

要約

保育を取り巻く社会情勢の変化の中で、保育所保育指針が改定され、2017（平成 29）年には「保育所等キャリアアップ研修ガイドライン」が整備された。その中で保育士養成課程を構築する教科目の見直しに向けた検討が行われ、「より実践力のある保育士養成」に向けて「保育士養成課程を構成する教科目全体の体系化・構造化、それによる各教科目の位置づけや教科目間の関連性の明確化（特に基礎事項の理解と、それを踏まえた実践力の習得）」が指摘されている。

本学では従前より保育・教育実習を、大学における専門的知識及び技術などの学びを「保育の実践力」として習得していく機会として重視し、実習を軸とし、各教科目を位置づけ、教科目間の関連を行っている。本稿では、実習指導と連携した保育関連科目のあり方を分析し、学生が主体的に実習に臨み、実習での学びがより深化するよう有効な教科目のあり方を考察した。

その結果、実習指導と「保育基礎ゼミ」との科目間連携において、保育現場で求められる保育実践力としての保育技術の基礎を習得する効果があることが示された。また、保育観察・記録方法の習得におけるグループワークは、実践力の基礎を身に付ける方法として有効だということが示唆された。

今後、教科目の位置づけや教科目間の関連性についても明確化し、より保育実践力のある大学での学びを深めるあり方を検討していくことが課題である。

キーワード：保育者養成 保育・教育実習 実習指導 保育基礎ゼミ 教科目連携

2018年9月28日受理（教育研究）

1. はじめに

保育実習実施基準では「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟する事を目的とする」¹⁾されている。

本学では「教育と実践を結びつけるために保育実習・幼稚園実習を軸に保育士並びに幼稚園教諭に必要な専門的知識及び技術を教授し、保育士資格並びに幼稚園教諭免許状を取得するとともに、児童福祉・幼児教育の発展に貢献する人材を養成する」こ

とを目的とし、実習を軸とした養成教育を行っている。

また、保育を取り巻く社会情勢の変化の中で、2015（平成 27）年 4 月には「子ども・子育て支援新制度」が施行され、2017（平成 29）年 3 月には保育所保育指針が改定された。（厚生労働大臣告示、2018 年 4 月適用）さらに同年、「保育所等キャリアアップ研修ガイドライン」が整備されたことを踏まえ、今後の保育士に必要となる専門的知識及び技術を念頭に置きつつ、保育士養成課程を構築する教科目の見直しに向けた検討が行われた。見直しの観点は、「より実

*大阪健康福祉短期大学

連絡先：高砂 朋子

〒590-0075 堺市堺区南花田口町 2 丁 3-20

大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科

E-mail: t.takasago@kenko-fukushi.ac.jp

**大阪健康福祉短期大学

実践力のある保育士養成」である。そのための留意点として「保育士養成課程を構成する教科目全体の体系化・構造化、それによる各教科目の位置づけや教科目間の関連性の明確化（特に基礎事項の理解と、それを踏まえた実践力の習得）」が指摘されている。

2)

確かに、保育・教育実習は、養成教育において保育技術の基礎を習得する最も重要な科目だといえる。なぜなら、実習は大学における専門的知識及び技術などの学びを、保育現場における学生自身の実体験を通して子ども理解を深めながら「保育の実践力」を習得していく機会だからある。短期大学における実習指導は、入学年次に始まる。学生にとって実習は楽しみな反面、非常に高い不安感や緊張感を伴う。また、実習での子どもや保育者との出会いが、その後の学び方や就職へも大きな影響を与えている。そういった事を考えると、実習を軸とした教科目との連携は欠かせないといえる。したがって、実習を教科目の中心に位置づけ、実習を軸とした効果的な科目間連携のあり方を検討する必要がある。

本学では、実習を軸とした関連科目との連携について分析、検討が十分できている状況にない。そこで、実習指導と連携した保育関連科目のあり方を分析し、学生が主体的に実習に臨み、実習での学びがより深化するよう有効な教科目のあり方の考察が必要である。

本稿では実習を軸とした関連科目である本学独自科目「保育基礎ゼミ」と実習指導のあり方に焦点をあて、効果と課題を明らかにする。

2. 本学の実習教育の特徴

本学の実習教育のあり方については、国の保育士養成課程における見直し等の動向を踏まえ、検討を重ねてきている。近年、個別配慮の必要な学生の増加や保護者対応など、実習に向うまでのプロセスで教員が時間を取られる事が多くなっている。個々の学生の不安感や高い緊張感を和らげ、少しでも実習を楽しく経験できるようにするため工夫している特徴は以下の通りである。

実習指導においては、一貫した実習指導体制を確立し、その指導にあたる教員相互の連携を行って

る。実習指導体制は、その学年を担当する複数教員と現場経験のある非常勤講師が固定メンバーとして実習指導チームを構成している。そして、学生の入学から卒業に至るまでを継続的に指導にあたる。非常勤講師はその専門性を活かし、主に指導計画や教材研究の指導を行い、一人ひとりの学生状況に寄り沿いながらの指導にかなりの時間を費やしている。授業の前後には学生把握や学生理解を深めるための会議時間を設けるなど工夫している。同時に、実習施設とは、実習施設指導者懇談会を継続的に実施し、実習の際の個々に配慮が必要な学生状況は、実習施設と密に連絡を取りながら遂行していく関係性を確立している。

中西らは「教育効果を高めるには多様な学生のタイプを分析し、それにあつた教育方法を準備する必要があるだろう。開発された教育方法は指導だけに適用するのではなく、その他の実習種別の指導においても活用できることが望まれる。また、実習指導体制やカリキュラム充実策と連動させて検討する必要がある。」として、今後、実習指導の効果を高めるために、それぞれの学生のタイプに適した教育方法の検討が必要であるとしている。³⁾

本学において、今後もこうした傾向は強まっていく事は予想される。そういった課題を達成していくためにもより効果的な科目間連携と実習指導を結びつけた教授内容の構築が必要だと考える。

筆者らは、実習指導における目的と昨年度の科目間連携について表にまとめ、実習指導の現状を分析した。

表1 実習の種別と目的（実習ハンドブック）⁴⁾

(1) 1年次

○教育実習

実習時期	実習の種類	実習目的	備考
7月	幼稚園実習 I (幼稚園・認定こども園)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児と触れあい、幼稚園の実態を知る。 ・ 幼稚園の生活の流れ、教師のかかわりや指導・援助の実際を観察する。 ・ 幼児との交流を通して、幼児のありのままの姿を観察し、幼児の心を知る。 ・ 実習に必要な手続きや実習の記録の書き方を学ぶ。 	資格必修

○保育実習

実習時期	実習の種類	実習目的	備考
11月	保育実習 I a (保育所・認定こども園)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 乳幼児と触れあい、保育所の実態を知る。 ・ 乳幼児が保育士の保育活動の下に健やかに生活し、個々の能力を発達させている様子に学び、子どもへの理解を深める。 ・ 保育の場に参加し、子どもたちと交流する中で、乳幼児一人ひとりの心と身体の状態を理解する。 ・ 保育者の保育活動を体験することによって、保育の方法や保育所の社会的な役割について理解する。 ・ 実習に必要な手続きや実習の記録の書き方を学ぶ。 	資格必修
1月	保育実習 I b (乳児院・児童養護施設)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童福祉施設（居住型）の生活に参加し、他職種と協力して行なう保育士の生活援助の中で、子ども理解を深める。 ・ 児童福祉施設（居住型）の対象児とその家族の抱える問題や社会的背景について学ぶ。 ・ 実習に必要な手続きや実習の記録の書き方を学ぶ。 	資格必修

(2) 2年次

○保育実習

実習時期	実習の種類	実習目的	備考
6月	保育実習Ⅱ (保育所・認定こども園)	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの子どもの心とからだの状態を把握し、保育課題を学び、乳幼児への集団的・個別的援助の実践を経験して理解を深める。 保育活動への参加を通して、保育者の職務の内容や役割、乳幼児の保育の方法や援助について、具体的・実践的に学ぶ。 保育所の設備と機能及び社会的な役割に関する現状と課題について学ぶ。 	資格必修

○教育実習

実習時期	実習の種類	実習目的	備考
9月	幼稚園実習Ⅱ (幼稚園・認定こども園)	<ul style="list-style-type: none"> 幼児の心身の発達に必要なかつ十分な環境を整え、幼児の活動を援助する指導方法を具体的に理解する。 指導の目標を立て、環境や計画を整えて、幼児に適切に働きかける方法を具体的な実践を通して学ぶ。 	資格必修

(3) 2年次選択

卒業実習

実習時期	実習の種類	実習目的	備考
11月※	卒業実習Ⅰ (障害児・者施設)	<ul style="list-style-type: none"> 障害児・者を対象とした施設における保育や生活に参加し、保育活動や生活援助の中で対象者の理解を深める。 障害児・者施設の対象者とその家族の抱える問題やその社会的背景について理解し、保育士の保育内容や他職種との連携について学ぶ。 	選択必修
11月※	卒業実習Ⅱ (児童館)	<ul style="list-style-type: none"> 児童館の機能や役割について理解する。 施設における集団としての子ども及び個人としての子どもについて実践を通じて理解する。 指導員、保育の職務内容やチームワークを理解する。 <p>*児童厚生2級指導員資格の取得にはこの実習が必要。</p>	資格必修
11月※	卒業実習Ⅲ (学童保育)	<ul style="list-style-type: none"> 学童保育所の設備の機能、および社会的な役割に関する現状と課題について学ぶ。 一人ひとりの子どもの心と体の状態を把握し、保育課題を学び、集団的・個別的援助の実践を経験する。 	選択

※11月実施を原則としますが、実習時期が変更になる場合があります。

表2 科目間連携 (2018年5月 日本保育学会 発表資料分を加筆修正)

科目	1年前期 (1セメスター)					1年後期 (2セメスター)							
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		
実習指導	幼稚園実習指導					事後指導	保育所実習指導			事後指導	施設実習指導	事後指導	
保育基礎ゼミ I (前期)	○実習入門 保育園見学「子どもの観察」(観察記録の取り方) ○実習準備「名札」制作 ○保育技術入門「壁面制作」「手遊び」 保育園訪問・手遊び披露・壁面プレゼント					幼稚園実習 I・1週間							
保育基礎ゼミ II (後期)							○実習の基礎 保育所の一週・保育者の配慮 ○保育技術入門 「手袋人形」制作			○施設実習入門 調べ学習「養護施設(乳児院)とは		○実習のまとめ	
保育内容総論	手遊び・ふれあいあそび・絵本の交流 「養護」と「教育」の一体 「遊び」を通じた保育 実践・視覚教材を通じ具体的な事例に学ぶ 「指導計画」のあり方						○保育教材作り「パネルシアター」 保育実習等で実践						
保育内容言葉	○「言葉」を促す児童文化 絵本の世界 ○演習「ペープサート」の制作 幼稚園実習で実践						集中講義(9月) リズム運動(保育園) 民舞 和太鼓 和太鼓 リトミック						
保育内容表現 (集中講義)							発達と保育						
発達心理学	子どもの発達					保育の法的根拠・基礎 指導計画案作成			実習経験を踏まえて学びを深める				
保育原理						養護の基礎・手作り玩具			実習経験を踏まえて学びを深める				
教育課程論						養護施設の基礎的理解							
乳児保育													
社会的養護													

科目間連携について整理したのが表2であり、以下のような効果が明らかになった。

①本学の専任教員の教科については、実習を軸にした連携に取り組み、構造化をすすめている。(実習時期・内容を意識した教授内容の工夫と科目間内容重複の整理等)

②座学・理論として学ぶ科目については、現場体験から子ども理解を通して学習内容を深める。

(保育内容・記録の書き方・乳幼児の発達・保育施設の役割・保育実習のイメージ等)

③現場体験学習は、座学における知識の理解と深い学びにつながる。

④保育技術の基礎を習得する。実際に保育現場や子どもと関わることで、目標をもって学習に取り組むことができる。

⑤実習へ送り出す前に個々の学生の現状を把握し、課題を明らかにして実習へ送り出すことができる

上記のような、科目間連携による効果が、教科目の知識、技能を基礎として、総合的に実践する応用能力を養うこととして、繋がっているということが分かった。

3. 本学独自科目「保育基礎ゼミ」と実習指導の連携の現状

(1) 保育基礎ゼミの目的とねらい

本学は独自科目として「保育基礎ゼミ I」(1セメスター)及び「保育基礎ゼミ II」(2セメスター)を設置している。ゼミは、原則週1回の授業時間内における学習集団の単位として位置づけ、学生の知的関心に基づき主体的に学習に取り組める場としている。そこにゼミ指導教員が参加し、学生の学習をバックアップしている。ゼミは、少人数の利点を活かして教養力を養成し、多様な方法を利用して専門教育の導きを行い、報告・討論なども行っている。本科目は、3つのカテゴリーで構成し、各々の目的とねらいを簡潔に示すと以下の通りである。

(ア)大学での学び方：個人研究や小集団で討論し、大学での学びを深める。

(イ)保育技術入門—保育現場で求められる保育技術を研究し、実践する。

(ウ)実習入門—実習と関連づけて学ぶ。(観察・記録など)

到達目標としては、「福祉や教育に関することについて多面的・総合的な視点から問題を把握し、解決する事の重要性を認識できる。また実習を通して、

表3 実習指導と保育基礎ゼミⅠ・Ⅱの教授内容

月	実習指導	保育基礎ゼミⅠ	
1セメ スター	4 実習の意義	ガイダンス	
	幼稚園実習の目的と概要	新入生交流会	
	保育技術(ペープサート)模擬保育	保育技術 教材制作	
	5 保育技術(絵本・紙芝居)	入門① 名札づくり	
	事前訪問について	保育園見学	
	6 書類・記録の書き方	実習入門 観察記録	
	保育技術(絵本・紙芝居)	振り返り	
	事前訪問について	グループワーク	
	書類・記録の書き方	保育技術 季節の壁面画制作	
	自己課題	入門② 手遊びの実演	
7	幼稚園実習(観察実習1週間)		
	事後指導		
	実習の振り返り		
2セメ スター	月	実習指導	保育基礎ゼミⅠ
	9 実習の意義	実習の基礎	保育所の1日・保育者の配慮
	保育所実習の目的と概要		保育技術入門
	10 指導案作成・模擬保育		手袋人形制作
	保育技術(絵本・紙芝居)		
	11 事前訪問について		
	記録の書き方		
	自己課題		
		保育所実習(参加実習・10日間)	
		事後指導	
		実習の振り返り	
	12 実習の意義	調べ学習「児童養護施設・乳児院」	
	施設実習の目的と概要		
	1 実習の意義		
	施設実習の目的と概要		
事前訪問について			
記録の書き方			
自己課題			
	児童養護施設実習(参加実習10日間)		

保育者として求められる基礎的な知識や保育技術及び実習における指導方法が説明できる」として、2006(平成18)年から開設した。いわば、多様な家庭的背景を持って入学している学生が、大学生活がスムーズに送れ、保育者を目指すにあたって、十分な保育の実践力を身に付けることで実習指導をより深め、人間的に豊かな学びをつながることをめざしている。

(2) 保育基礎ゼミと実習指導の関連

1年次の実習及び実習指導と保育基礎ゼミの教授内容を時系列に整理したのが表3である。保育基礎ゼミと実習指導の現状や課題については(3)、(4)で述べる。

(3) 保育基礎ゼミ教授内容と実習指導の連携の現状

保育基礎ゼミⅠにおいては、「実習への導入」と位置づけ「保育園や子どもに親しみをもつ」「子どもの文化に触れその楽しさを体験する」「『子どもたちのために』を目標に力を合わせる事」に取り組んでいる。また、「保育内容総論・言葉」、「発達心理学」等の科目と連携しながら進めている。表2でもわかるように、7月に初めての幼稚園実習を控え、実習入門として、実習指導が始まるのと同時に「保育基礎

ゼミⅠ」でも、近隣の保育園を訪問し、「子どもと触れ合う」「子どもの姿を観察・記録する」事を通して、「子ども理解」を深める。最終的には、その子どもたちへ「手遊び」の実演、「季節の壁面制作」をプレゼントに行く。

また、実習で活用する名札の手作り制作、手遊びの実践など、実習に必要な教材の研究、子どもの文化に触れる機会を多く持つよう工夫している。

保育見学の体験学習は、学生がもっている子どもに対しての理解や保育への興味・関心をさらに引き出す効果があると同時に、「見る力」「感じる力」の基礎となる学習意欲を培い、モチベーションを高めていることがわかる。学生は身だしなみを整える等の準備を行い、心構えをつくって保育現場へ自ら足を運ぶ。実際に保育園で生活する子どもと関わり、保育者とその保育場面において、援助や配慮を行うその様子を具体的に記録する学習は、教室での学びではできない効果を得ている。

保育基礎ゼミⅡは「実習準備の具体化」と位置づけ、「教材研究」「実習施設の概要を調べる」等、実習指導と平行しながら、保育の実践力として発揮できる基礎力の引き上げを目的としている。

11月に保育実習Ⅰa(保育所10日間)、1月に保育実習Ⅰb(養護施設又は乳児院10日間)を控え、学

生の緊張も高まっている。その中で、できる手遊びの数を増やす事や手袋人形などの教材を制作することは、実習時の実践に役立ち、学生の安心感にもつながっている。また、保育所や児童養護施設・乳児院実習については、実習指導以外の教科目でも平行して基礎知識を学ぶ。その学びをより深めるために、保育基礎ゼミⅡでは、「調べる」「まとめる（作る）」「報告する」「共有しあう」事で、保育者として必要な人間関係を構築するための基礎を身に付けていく効果がある。

（４）保育基礎ゼミと実習指導の連携における特長

上記のように、保育基礎ゼミでは、実習を主軸にした授業として連動させ、学生が実習でのより豊かな学びや体験が経験できるように工夫をしてきた。2017（平成29）、2018（平成30）年度の保育基礎ゼミで重視したポイントは下記の点である。

（ア）体験学習を中心とすることで実習への見通しを作り、モチベーションを高める。

現場で「子どもから学ぶ」ことを大切に位置づけることで、保育の流れや保育士の配慮の意味が理解しやすい。

（イ）授業で作成した教材を使って実習で実践する。

教材研究が実習と連携することで、実習に対して不安を伴う学生が主体的に臨むことができ、緊張の中にも子ども達にあそびを楽しんでほしいという対象への思いをもち、子どもの姿を意識したりイメージしたりしながら取りくめるようにしている。

（ウ）指導計画の作成における授業内容の工夫を行う。

保育実習Ⅰaでは指導計画案を作成し、設定保育を実践する事を課題としている。

指導計画における「導入・展開・まとめ」を意識して報告し、作成する指導計画案の不十分な点に学生自身が気付き、実習の心構えを強化することができた。

上記のような工夫をすると同時に実習指導においては、具体的に実習に行く施設の概況を学び、実習に必要な書類等を準備し、実習に向った。実習後の報告会でも学生から「楽しかった」「子どもがかわいいと思った」という感想を聞くと、1年次のよいス

タートを切れたといえる。しかし、近年の学生状況としては、他にも深刻な課題をかかえている事が、実習評価や実習指導者懇談会等から出されている。

4. 近年の学生状況と実習指導の課題

本学では、保育実習をより充実させるための工夫として、毎年実習指導者懇談会を開催して、実習のあり方や学生状況について養成校と実習施設との間で情報交換や課題の検討を行っている。2018（平成30）年度の懇談会で実習園より指摘された実習生の課題は以下の通りである。

- ①実習の記録（日誌）の書き方（誤字・脱字、文章表現、気付きが書けない）
- ②言葉づかい（敬語の使い方、マナー）
- ③積極性に欠ける（自分から声をかけて聞く、メモを取る又はメモに集中しすぎて子どもと遊べない）
- ④準備不足（指導計画案にもとづく教材、手遊び、絵本等）

指摘された事項は例年よく指摘されている事であり、「文章を書くのが苦手」「漢字が書けない、読めない」「見通しを持って準備ができない」「人の話を集中して聞けない」「積極性に弱い」等は、実習以外の教科目を担当する教員からも指摘されている。このことは、昨今の学生が過ごしてきた幼少期の遊び体験の不足など学生の育ちの要因とともに、大学での学びの中でも、課題を積み残したまま自信に結びついていないことが推察される。津田らの研究においても、「保育士養成課程にある実習生自身のマナーや家庭環境が、特別すばらしくて保育士養成課程に入ってきたわけではない。むしろ世情の縮図といえ、自身が適切な世話を受けた事がない者から理想的な環境で育った者まで、社会全体のありようと同様の傾向が見られると考えられる」と指摘している。⁵⁾

また、近年入学してくる学生の状況として、低学力や精神面での配慮が必要な学生が増加している。特に、「実習の記録が書けない」「誤字・脱字が多い」「文字がきたなく読みにくい」「提出期限を守らない」「積極性・意欲に欠ける」「表情が乏しい」「対人関係が築き難い」等の姿が特に目立つ。しかし、多くの学生が子どもとの出会いやかかわりの中で、「楽し

い」「嬉しかった」という体験だけでなく、自分が子どもから必要とされ、子どもから認められることにより自己肯定感を高め、「なんとなく保育士になりたい」から「前向きに保育士になりたい」という強い目標に変化していく。

「保育は現在を最も良く生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う」事であり、そのために「人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育てる事」「最善の利益を守る事」が保育所保育指針に記されている。⁶⁾ その保育に携わる保育者もその人権が大切にされ、現在を最も良く生き、望ましい未来を作り出す基礎力を身につけることを保育士養成校としての課題にすべきだと考える。社会の変化の中で学生の姿も変容しつつある。しかし、保育者の仕事は目の前の子どもを対象にしていることに変わりはない。現場体験を豊富にし、子どもから学ぶ授業が実習指導に活かされてくる。同時に学生に苦手意識や失敗があっても、自分自身の課題に向って粘り強く努力する意欲に変化する。ゆえに今後の教科目の教授内容として、現場体験をどのように組み込むかが課題となってくる。実習を軸に教科目間の関連性の位置づけや明確化を検討したい。

5. おわりに

本学においては、科目間連携を深めていくために、表2のように「保育基礎ゼミ」以外の授業でも連携を強めている。本学の専任教員は実習指導も共に行っていく体制を整備しているため、学生の姿や授業内容について、全体的に共有し合える場を意識的に設けている。そして、さらに今回作成した科目間連携の表2、表3を全教員で確認し合い、非常勤教員とも連携を深めていくことが課題である。

学生からは「実習に行った後、どの先生の授業も、実習で学んだ事のレポートを書かされる」と言った不満を聞くことがある。それは、どの教員も「実習を軸とした」教科目の内容を意識しているからであるが、毎回同じような事をレポートする学生の不満もわかる。より効果的な科目間連携について、連携表などを基にできるだけ多くの教員と共有し合いより教授内容の深化を工夫したい。

また、保育士・幼稚園教諭養成課程においては、今後「保育の実践力」をどのように高めるかということが課題となる。前述した本学での実習施設指導者懇談会において、「実習にくる学生には夢を持って、保育者に育ってほしいと思っている」と将来、保育者として育っていく学生を大事にしたい思いがたくさん語られた。

しかし、昨今は待機児童問題と同時に明らかになった保育者不足や保育者の賃金・処遇問題は保育者になりたいという学生にも影響を与えている。就職を考えるときに「将来結婚して子どもが生まれても養えないのではないかと躊躇する学生や、就職しても「忙しすぎて仕事内容を教えてもらえない」「職場の人間関係が築けない」「記録等事務的な作業がやりこなせない」等を理由に1~2年で退職してしまうケースも増えてきている。「保育者になりたい」と夢を持って入学してきた学生が2年間の学びを経て、保育者として羽ばたいていくには、保育をめぐる社会状況は非常に厳しいと言える。本来、「保育の実践力」は対象として目の前に子どもがいる状態で、子どもと一緒に積み上げていくからこそ高まっていくもの、保育を仕事として継続する中にあると考える。

養成校においては、保育者を目指す学生が自分自身と向き合い、「こんな自分でいいんだよ」という自己肯定感を育て、「失敗してもいいんだよ」と挑戦する気持ちを養う。また、子どもたちに喜んでもらったという達成感を持つような教授内容を積み重ねる事で「保育の実践力」につながる意欲や人間関係におけるコミュニケーション力、加えて多岐に渡る情報を管理するパソコン等のスキルを「保育者としての基礎力」として習得し、総合的に実践する応用力つけていく事が継続して保育に就くことができる「保育の実践力」につながると考える。

本学における「保育基礎ゼミ」の授業は、いわば、「保育の実践力」を高めるための入り口でもあり、「実習・実習指導」をより深めるもので、補完的な役割を果たしているといえる。しかし、本学の独自科目として位置づけることで、教授内容について創造的な工夫の幅が広がり、独自性が発揮できると考えられる。本学においては、実習施設との協働の中で「子どもに学ぶ」ことをより重視し、科目間連携

においても、実習施設に出かけて行って子どもと一緒に遊び、学んできたことを発表する場をより多く設けている。そのことが、学生の「保育の実践力」としての基礎力につながっていくように、今後、実習を軸とした科目間連携を広げ、より効果的な保育者養成教育につなげるようにしていきたい。今後の課題として、科目間連携の効果について、学生に対する実習前後のアンケート調査や実習施設の評価などから検証したい。

参考文献・引用文献

- 1) 厚生労働省「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」(別紙2) 保育所実習実施基準
- 2) 保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等の見直し

について～より実践力のある保育士養成に向けて～(検討整理)」(2017年12月4日)

- 3) 中西利恵、大森雅人、益田圭、曲田映世、高濱麻貴「実習指導の効果を高める教育方法の研究—保育所実習における学生の自己評価と現場評価の比較検討から—」(2010)『相愛大学人間発達学研究』pp.31-38
- 4) 大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科『実習ハンドブック』(2018) pp.6-7
- 5) 津田尚子、木村志保、小口将典、立花直樹、西元直美、仲宗根稔、「保育実習指導の事前指導の現状についての一考察」(2014)『関西福祉科学大学紀要第18号』
- 6) 厚生労働省編 『保育所保育指針解説書』「第1章 保育所保育に関する基本原則 (2) 保育の目標」 p.19

Current state and issues related to coordinating nursery care practice with “Basic Seminar on Early Childhood Care and Education”, our unique course and the axis of our training for student teachers and care workers

Tomoko Takasago*, Takayo Nagatani**

Abstract

Amid the changing social situation surrounding nursery problems, “The Comprehensive Support System for Children and Child-rearing” was enforced in 2015. In addition, the “Nursery Child Care Guidelines” were revised. In 2017, “Carrier-up Training Guidelines for Childcare Workers” was put into effect. Considering the professional knowledge and techniques essential to future nursery workers, a curriculum for training them has been examined to revise the subjects. The aim of the next revision will be “training nursery workers who have more practical power”. For this purpose, “All the subjects of the curriculum for training childcare workers must be systematized and organized. Each subject must be placed clearly in collaboration with other subjects. This will establish a future project, in which we should clarify the position and the coordination of all the subjects in order to deepen the students’ study, so that they may have more practical power.

Key words: training childcare workers, practice for early childhood care and education, practicum guidance, basic seminar of early childhood care and education, coordination of subjects

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address : Tomoko Takasago
〒590-0075 2-3-20 minamihanadaguchi-cho, Sakai-ku, Sakai City, Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Education
E-mail : t.takasago@kenko-fukushi.ac.jp
**Osaka College of Social Health and Welfare